

# 古墳出土砥石の基礎的研究

— 近畿地方の事例 —

角南 聡一郎，田部 剛士

## I. はじめに

本稿では古墳時代の墳墓から出土した砥石について、近畿地方の事例を集成し、墓と砥石の関係を検討しようとするものである。

古墳から稀に砥石が出土することがあるが、これらの砥石について具体的に検討が加えられることは少なかった。そこで全国的な視点での検討に向けて、本稿では近畿地方出土の事例を集成し、その内容について考えたい。また、この問題と関連して古墳時代研究において特に注目されている「携帯用砥石－提げ砥」をとりあげ、弥生時代～近世までの「提げ砥」を概観しながら、そのもつ意味について考えたい。

## II. 墳墓出土砥石の研究史

砥石自体の研究は乏しい。それだけに、古墳出土の砥石の研究は更に限定される。管見にふれた研究は提げ砥を中心に扱った二論文のみである。

入江文敏は我が国出土の提げ砥（携帯用砥石）は朝鮮半島から将来した佩砥（腰帯から垂らした砥石＝威信具）と実用砥石としての提げ砥に区別されるとし、これらの提げ砥は我が国では、古墳時代中期（TK208型式前後）以降の遺跡から出土するとする。佩砥には使用痕が認められないのに対して、列島の群集墳から出土する実用砥石の多くは使用痕が認められるとしている。また、これら2種の砥石を個人の所有品だと判断している。列島出土の提げ砥は、小型品であったり、均整がとれていない形態をとる場合が多いため、日本への将来時の佩砥の意味は失われ、提げ砥の普及が佩砥の形骸化を促し被葬者が保有した砥石のバラエティーの一つに様変わりしたと考えている（入江 1998）。

門田誠一は多くを入江文献に依りながらも、古墳時代前期から後期の古墳出土の提げ砥を含めた砥石をもつ人物は、古墳に葬られた男性被葬者の所有するものであると推定し、それらの人物の階層や属性は必ずしも首長層とはいえないとする。また、朝鮮半島では、三国時代、提げ砥がおそく

とも4世紀代には墳墓や住居址から出土することが知られ、個人が砥石を懸垂して使用する風習はすでにこの頃には行われていたことが確実であるとした。その上で日本の古墳時代における提げ砥には実用品として男性の身に付けられるもの、大型で未使用のもの2種がともに副葬品として墓に納められるとしている。このような提げ砥の取り扱いの違いは、前者が同種の実用品が出土している百済地域などから、実用の鉄器などとともに移入されたものと推定されるのに対し、後者は明らかに新羅から流入した習俗と考えられるとした(門田 2001)。

以上概観してきたように、これまでに古墳出土砥石の検討は提げ砥の検討にかぎられ、砥石全体を含めての検討が行われていないことが判明した。そこで本稿では古墳出土の砥石を「据え置きのもの」と「携帯用のもの」を別け隔てなく集成し、検討を加えていくことにする。

### Ⅲ. 古墳出土砥石の様相

近畿地方の古墳時代墳墓から出土した砥石としては39例を確認することができた(表1・図1～11)。府県別では、大阪府6例、兵庫県4例、奈良県19例、京都府6例、滋賀県1例、和歌山県3例である。分布では奈良県からの出土が多いことが見て取れる。そのほとんどが携帯用の小形のものか「提げ砥」であり、大形ものは古墳副葬品としてではなく、石枕に転用されたものでありその他の使用例は見られない。古墳内での出土位置としては、木棺主体部や横穴石室内に配置される例が多く、周溝内からや墳丘上からの出土例は少ない。このことは砥石が「副葬」を主目的として墳墓内に持ち込まれるものであり、埋葬後の供献を主目的として用いられる可能性の少ないことを想定させる。

砥石の石材は、泥岩・頁岩・粘板岩系と凝灰岩系、流紋岩が認められるが、これらの石材は主に白色～淡黄色を呈しており、報告者によって記載が異なるが、同一の石材である可能性が高い。この白色～淡黄色をした石材

は、近畿地方において弥生時代以降の砥石に一般的に利用されている石材であり、墳墓以外の場においても多用されていることから、墳墓内に副葬される砥石資料が特別に石材を選択しているとは言えないことを物語っている。

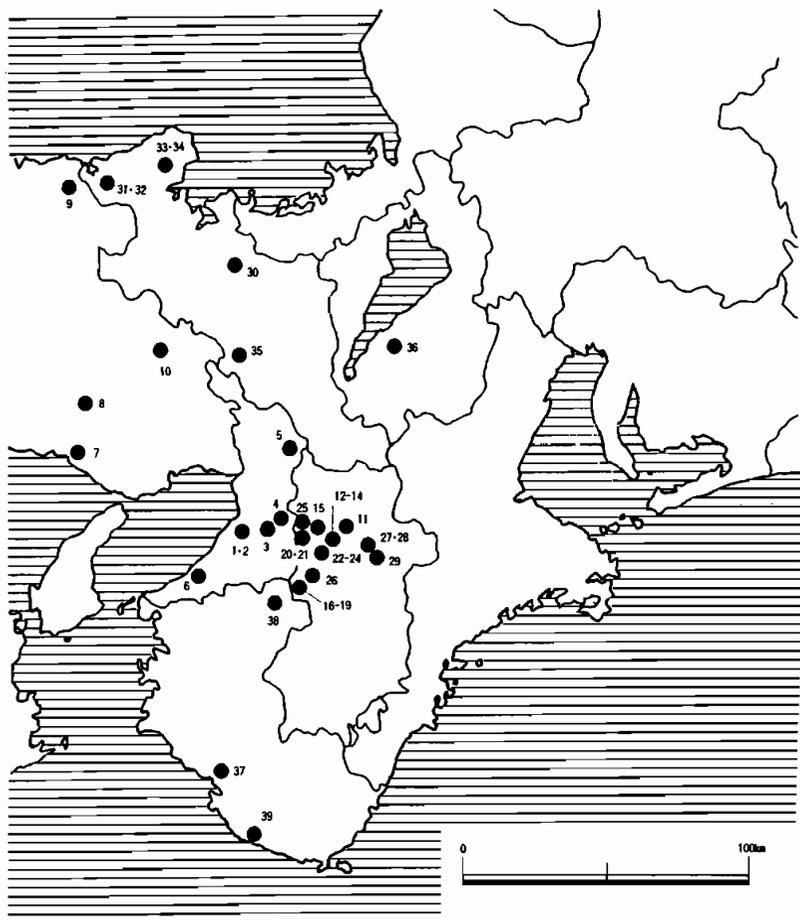
時期は京都府ケンギョウの山3号墳と7号墳例が4世紀に遡る可能性があるが、残る大半の古墳時代砥石は5世紀後半から6世紀に属する文物であると考えられる。7世紀前半以降、砥石を副葬品として納める古墳はなくなるようである。

横穴式石室内から出土した資料については追葬等のため、伴出遺物の同定が困難な場合が多い。そこで木棺直葬墳の主体部内から出土した資料の共伴遺物を中心に見ていきたい。大阪府鞍塚古墳では方格規矩鏡・鉄刀・鉄剣・鉄鏃・鉄鉞・三角板革綴短甲・鋌留式頸甲・三角板鋌留衝角付冑・鏡板付轡・鞍鐙・輪鐙・雲珠・鉄鑿・鉄錐・鉄挺・鉄鎌・鉄斧・刀子・ガラス玉・碧玉製管玉・滑石製白玉が出土している（末永編 1991）。兵庫県保木山1号墳では鉄刀・鉄斧・鉄槍・鉄鏃・刀子が出土している（永井 1993）。奈良県五條猫塚古墳では、眉庇付冑・三角板革綴短甲・頸甲・珪甲・鉄鑿・鉄槌・鉄鉗・刀子・鉄鉞・鉄鏃（網干 1962）、奈良県市尾新淵2号墳では鉄鏃、刀子、ミニチュア鉄斧、ミニチュア鉄鋌先が伴っている（坂 1988）。奈良県兵家12号墳には鉄剣、長方形板革綴短甲、小札鋌留眉庇付甲、頸鎧、肩鎧、鉄鎌、鉄斧、鉄鏃、刀子、管玉・ガラス玉（伊藤編 1978）が、奈良県野山支群1号墳では鉄剣、鉄錐、鉄鏃（井上ほか 1988）が、また奈良県谷5号墳では鉄剣、鉄刀、鉄錐、鉄鏃、刀子、鑿子、吊金具が出土している（伊藤 1987）。奈良県塚山古墳では横引板鋌留衝角付冑、三角板鋌留短甲、鉄鏃、鉄鑿、鉄錐、鉄斧、鉄鎌、鉄錐、刀子（伊達・北野 1955）、奈良県近江1号墳では円筒棺の棺外から砥石が出土しているが、棺外には鉄刀、鉄鏃、鉄鉞、鉄斧、鉄錐、刀子が副葬されていた（末永 1941）。

表1 砥石出土古墳一覧

No.	遺 跡 名	所 在 地	出 土 位 置
1	檜尾原8号墳	大阪府堺市	石室内
2	牛石7号墳	大阪府堺市	石室内
3	鞍塚古墳	大阪府藤井寺市	棺外
4	高井田E号墳	大阪府柏原市	玄門
5	倉治第3号墳	大阪府交野市	
6	三田古墳	大阪府岸和田市	石室内
7	池尻15号墳	兵庫県加古川市	石室内
8	保木山1号墳	兵庫県加西市	主体部
9	スクモ塚1号墳	兵庫県城崎市	石室内
10	真南条上3号墳	兵庫県多紀郡丹南町	SX02
11	竜谷	奈良県桜井市	
12	新沢千塚82号墳	奈良県橿原市	主体部
13	新沢千塚28号墳	奈良県橿原市	封土中
14	新沢千塚50号墳	奈良県橿原市	墳頂部
15	三倉堂	奈良県大和高田市	第二号棺
16	五條猫塚古墳	奈良県五條市	
17	近江1号墳	奈良県五條市	円筒棺棺外
18	塚山古墳	奈良県五條市	副室
19	南阿田栗山古墳	奈良県五條市	石室内
20	寺口千塚13号墳	奈良県北葛城郡新庄町	盗掘壊
21	寺口忍海E-21号墳	奈良県北葛城郡新庄町	棺外
22	タニグチ2号墳	奈良県高市郡高取町	杯内部
23	市尾新測2号墳	奈良県高市郡高取町	墓壇・墳丘流土中
24	イノヲク9号墳	奈良県高市郡高取町	掘割
25	兵家12号墳	奈良県北葛城郡当麻町	主体部
26	越部1号墳	奈良県吉野郡大淀町	石室内
27	野山支群1号墳	奈良県宇陀郡榛原町	棺外
28	谷5号墳	奈良県宇陀郡榛原町	第1主体部東小口
29	見田・大沢1号墳	奈良県宇陀郡菟田野町	墓壇北西隅
30	キツネ塚古墳	京都府綾部市	石室内
31	畑大塚2号墳	京都府熊野郡久美浜町	石室内
32	崩谷1号墳	京都府熊野郡久美浜町	石室内
33	ケンギョウの山3号墳	京都府竹野郡弥栄町	第1主体部
34	ケンギョウの山7号墳	京都府竹野郡弥栄町	墳丘南側
35	岸ヶ前2号墳	京都府船井郡園部町	埋葬施設1棺外
36	宮山1号墳	滋賀県野洲郡野洲町	石室入口西南隅
37	磯間岩陰遺跡	和歌山県田辺市	第3号石室内
38	陵山古墳	和歌山県橋本市	
39	上ミ山古墳	和歌山県西牟婁郡すさみ町	石室内

時 期	石 材	備 考	文 献
6c 中～後葉			奥・中井ほか 1990
6c 中～後葉			奥・中井ほか 1990
5c 後葉			末永編 1991
6c 後半	流紋岩		安村 1987
6c 後～7c 初	泥板岩	四面全て使用仕上げ砥	泉本ほか 1975
6c 中～後葉		かなり使用されている	駒井 1993
6c 中葉	黒緑色頁岩		上田ほか 1965
5c 末～6c 初		石枕に転用	永井 1993
6c 後葉	泥岩	使用痕顕著	瀬戸谷 1979
5c 中葉		使用痕顕著	別府ほか 1995
6c 前半		提げ砥	前園・関川 1978
5c 末～6c 初			伊達編 1981
			伊達編 1981
6c 後～末			伊達編 1981
6c 後葉			泉森 1984
5c 初頭		中砥・仕上げ砥が6点出土うち一点は提げ砥	網干 1962
6c 後葉		2点出土	末永 1941
5c 後葉	粘板岩	2点出土、1点は使用痕顕著	伊達・北野 1995
6c 前半～後半		提げ砥	金谷・網干 1958
6c 中葉	流紋岩	2点出土	坂ほか 1991
5c 後半～末		使用痕顕著、仕上げ砥	千賀ほか 1988
5c 末		提げ砥	河上・西藤 1996
6c 前半		2点出土、1点は提げ砥	坂 1988
6c 後葉			木場編 1991
5c 後半～末	砂質凝灰岩	両端欠損	伊藤編 1978
6c 後～7c 初	砂岩系の石材	2点出土、1点使用痕顕著	本村編 1997
5c 末～6c 初	流紋岩	2点出土	井上ほか 1988
5c 末～6c 初	凝灰岩	提げ砥	伊藤 1987
6c 中葉	流紋岩	使用痕顕著	亀田編 1982
6c 後～7c 初		使用痕顕著、石枕として転用か	三好 1998
6c 中～7c 全葉	凝灰岩	使用痕顕著	山内 1988
6c 後～7c 初	凝灰岩		岡田 1988
4c 後葉			三好 1987
4c 後葉		使用痕顕著	三好 1987
5c 中葉	頁岩	2点出土、1点は提げ砥	門田編 2001
6c 後葉	泥岩、凝灰岩	2点出土、1点は線刻で文様あり	樋口編 1993
5c 後～末		2点出土	堅田 1970
			金谷 1963
			伊勢田 1972



- |             |              |                |                |
|-------------|--------------|----------------|----------------|
| 1. 檜尾原8号墳   | 11. 竜谷       | 21. 寺口忍海E-21号墳 | 31. 畑大塚2号墳     |
| 2. 牛石7号墳    | 12. 新沢千塚82号墳 | 22. タニグチ2号墳    | 32. 崩谷1号墳      |
| 3. 鞍塚古墳     | 13. 新沢千塚28号墳 | 23. 市尾新湖2号墳    | 33. ケンギョウの山3号墳 |
| 4. 高井田E号墳   | 14. 新沢千塚50号墳 | 24. イノラク9号墳    | 34. ケンギョウの山7号墳 |
| 5. 倉治第3号墳   | 15. 三倉堂      | 25. 兵家12号墳     | 35. 岸ヶ前2号墳     |
| 6. 三田古墳     | 16. 五條猫塚古墳   | 26. 越部1号墳      | 36. 宮山1号墳      |
| 7. 池尻15号墳   | 17. 近江1号墳    | 27. 野山支群1号墳    | 37. 磯間岩陰遺跡     |
| 8. 保木山1号墳   | 18. 塚山古墳     | 28. 谷5号墳       | 38. 陵山古墳       |
| 9. スクモ塚1号墳  | 19. 南阿田栗山古墳  | 29. 見田・大沢1号墳   | 39. 上ミ山古墳      |
| 10. 真南条上3号墳 | 20. 寺口千塚13号墳 | 30. キツネ塚古墳     |                |

図1 古墳出土砥石の分布 (No. は表1に対応)

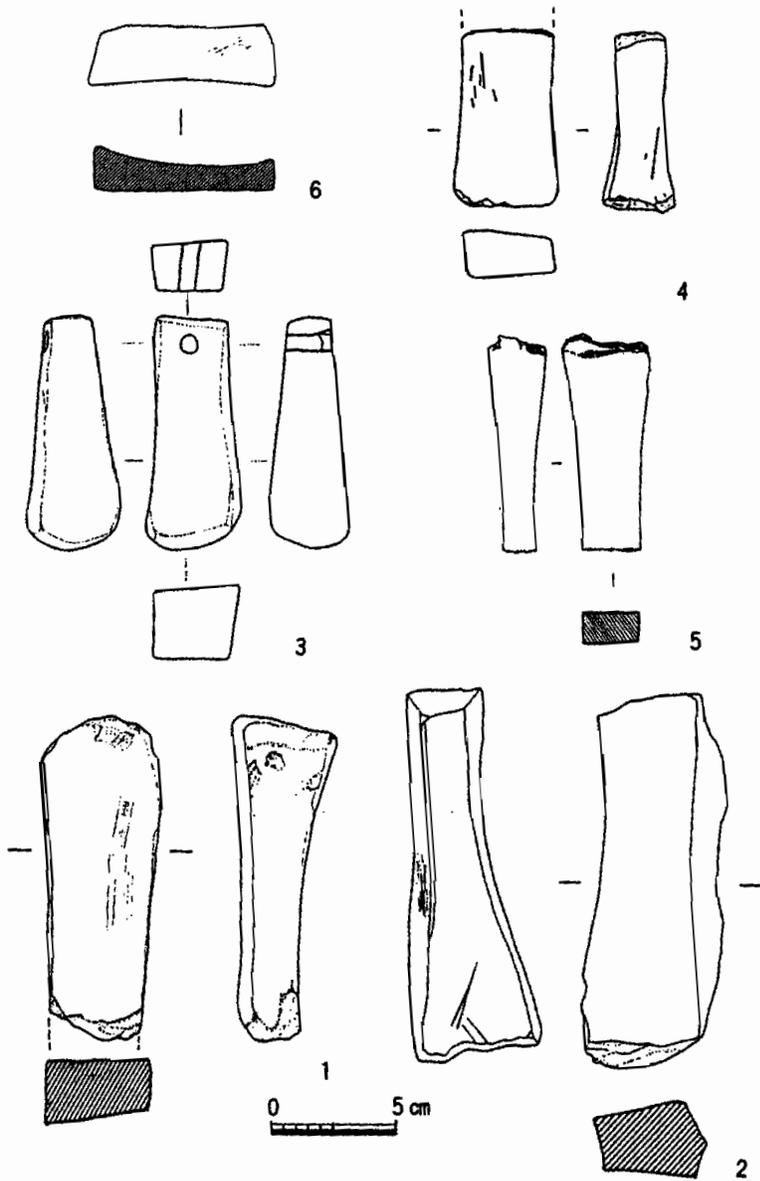


図2 古墳出土の砥石(1) (No. は表1に対応)

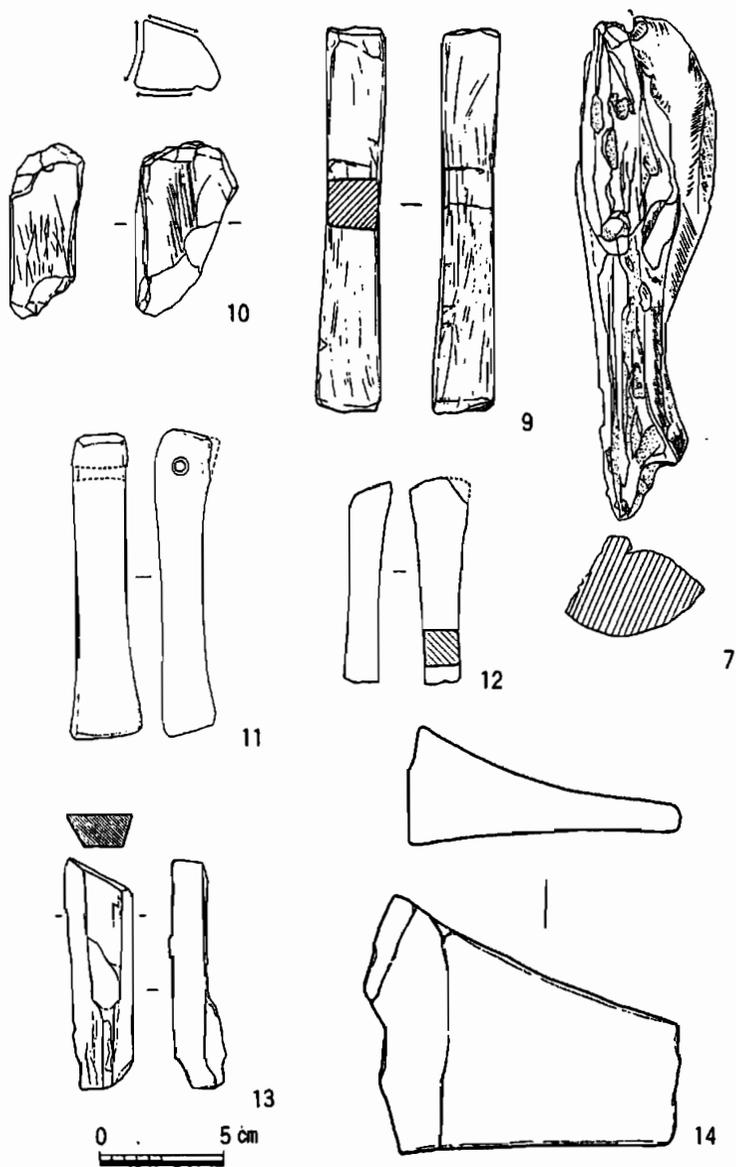


図3 古墳出土の砥石(2) (No. は表1に対応)

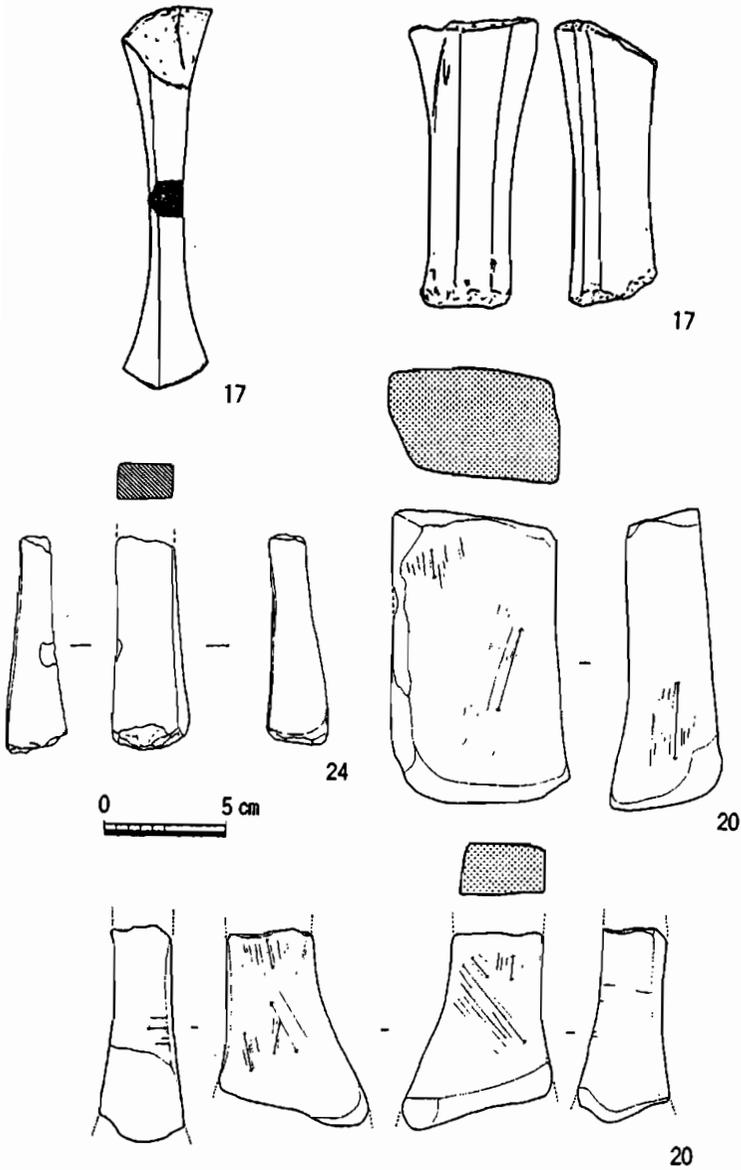


図4 古墳出土の砥石(3) (No. は表1に対応)

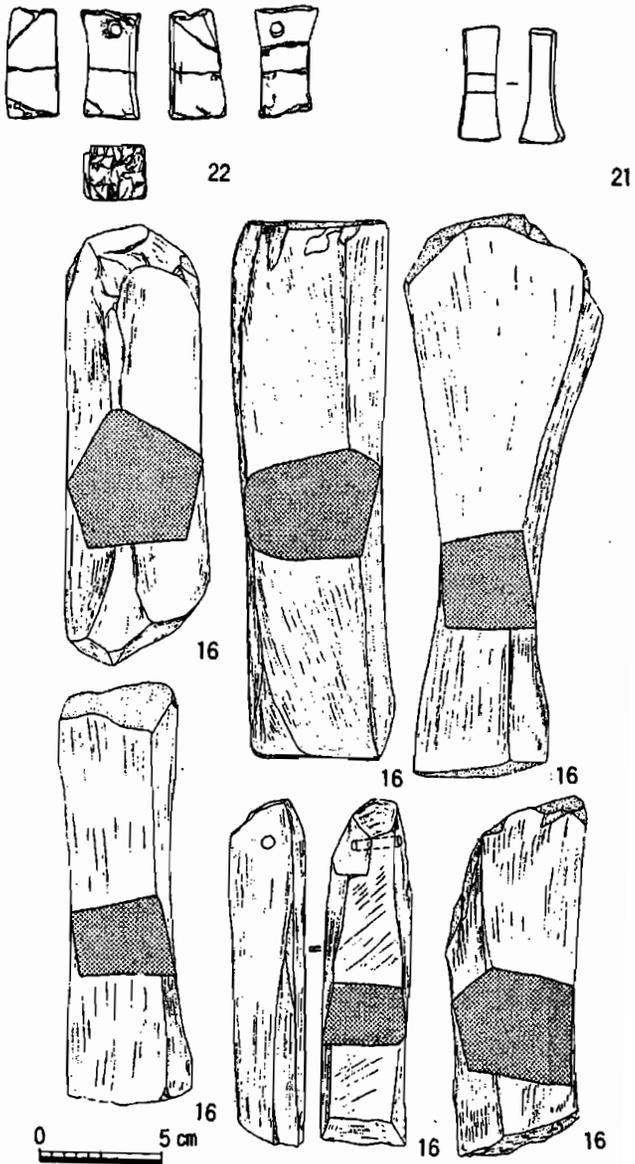


図5 古墳出土の砥石(4) (No. は表1に対応)

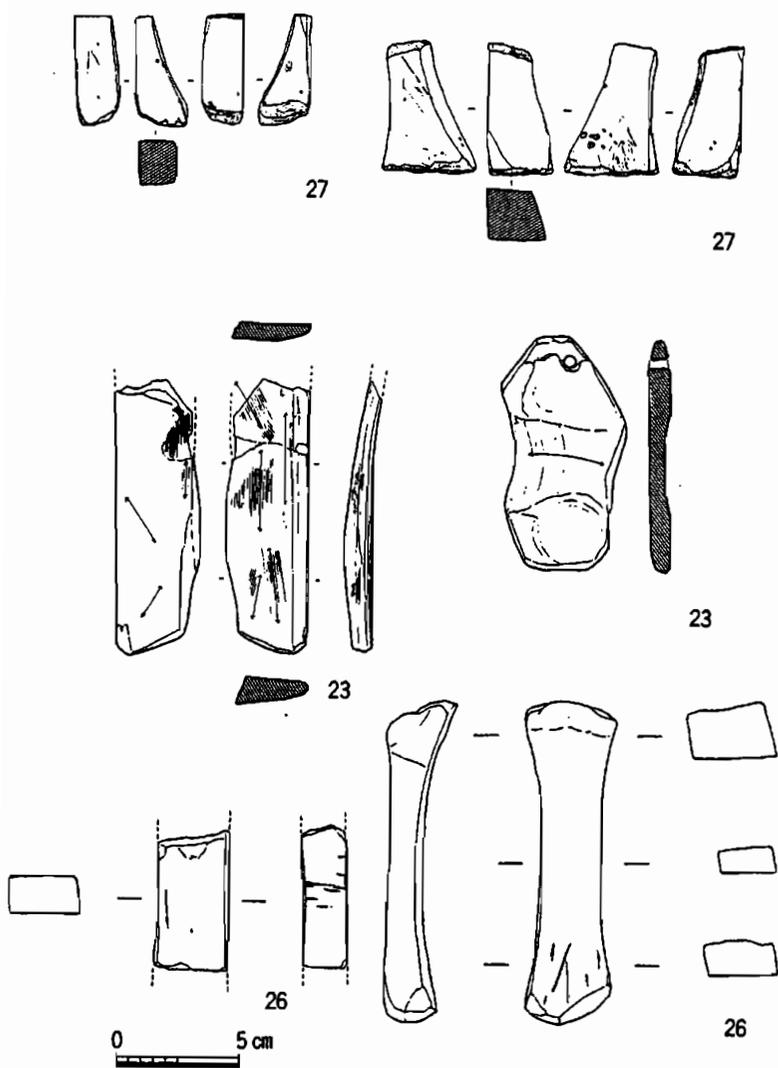


図6 古墳出土の砥石(5) (No. は表1に対応)

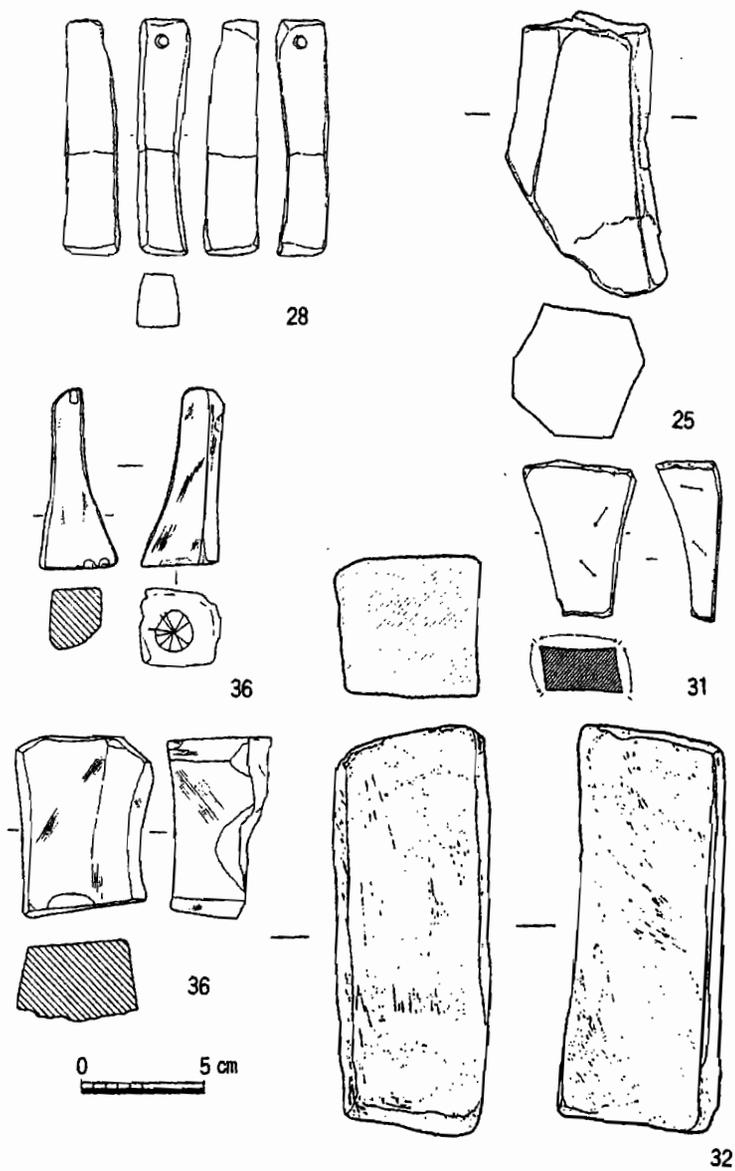


図7 古墳出土の砥石(6) (No. は表1に対応)

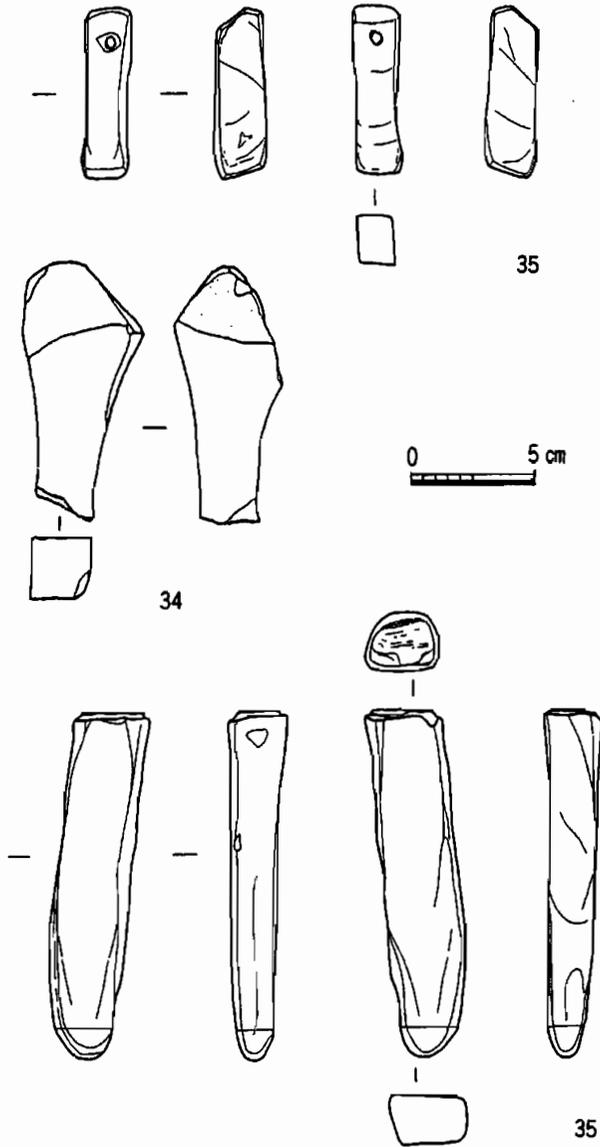


図8 古墳出土の砥石(7) (No. は表1に対応)

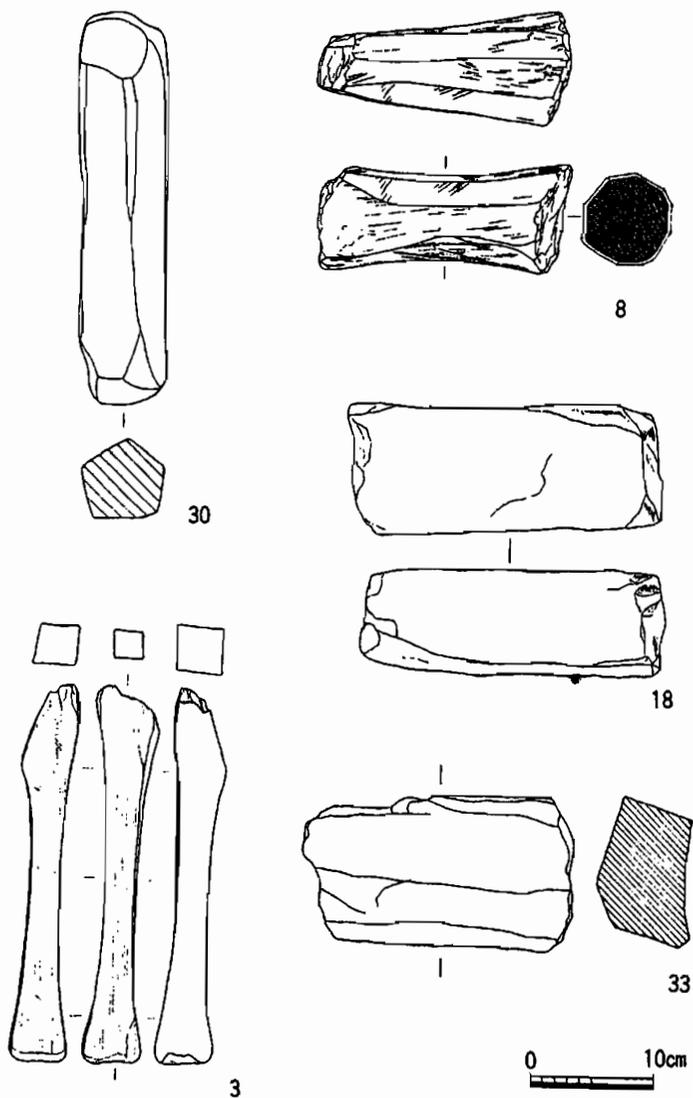


図9 古墳出土の砥石(8) (No. は表1に対応)

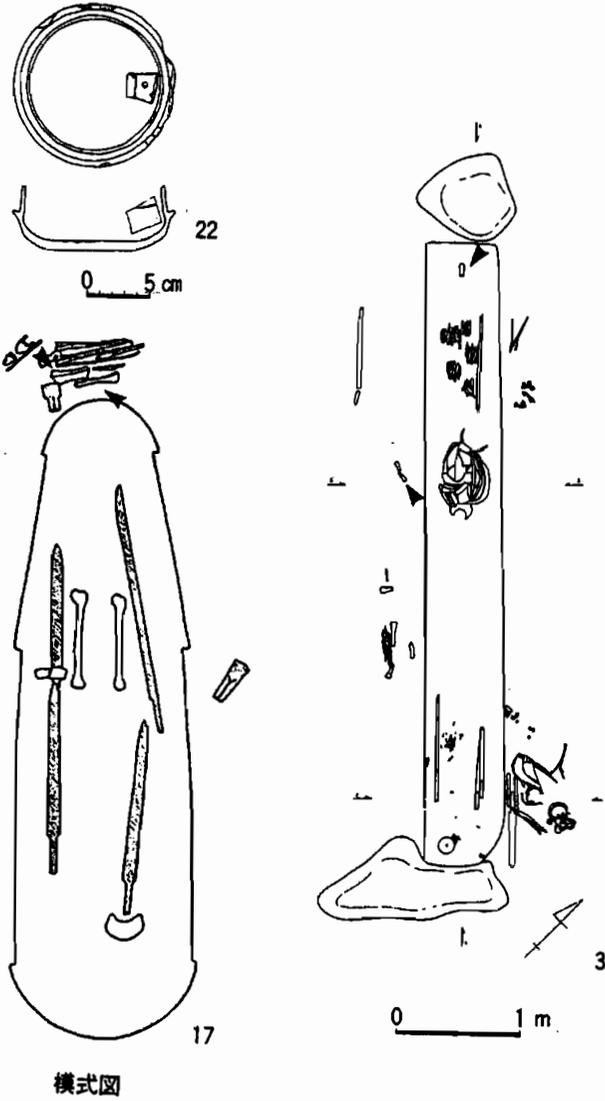


図10 砥石の出土状況(1) (No. は表1に対応)



図11 砥石の出土状況(2) (No. は表1に対応)

以上の諸例から、これまで指摘されてきたように、砥石は武器・甲冑及び鉄製工具に伴うことが多いことがわかる。確かに出土している砥石を観察すると、側面や稜の部分に明らかに鉄器を研ぐのに用いたと考えられる、鋭くて細かな溝が数条認められるものが含まれている。

特殊な事例として、奈良県タニグチ2号墳の事例があげられる。これは、主体部南小口に須恵器杯が蓋身セットで2組出土しており、このうち一組の杯身内部から提げ砥が出土した。報告ではこの提げ砥は被葬者の携帯物と考えられている（河上・西藤 1996）。副葬行為における砥石の取り扱いを考える上で興味深い資料である。また、滋賀県宮山1号墳では石室入口付近の西南隅から出土した泥岩製砥石の下面に細い線刻で円形の文様が描かれている（樋口編 1993）。この砥石は実際に使用された砥石に線刻が施されたものである。本事例も砥石が副葬される際の取り扱いを考察する上で重要な資料である。

この他、兵庫県保木山1号墳や京都府キツネ塚古墳、ケンギョウの山3号墳などでは、使用した砥石をわざわざ石枕として転用した事例が認められる。これらも単なるリサイクルとして偶然に砥石を使用したのではなく、複数の事例があることからすれば砥石を石枕として利用する必然性があった可能性も考えられる。

#### IV. 副葬品としての砥石の呪術性

古墳時代以前の墳墓には砥石の副葬は無かったのだろうか。その意味を考察するために時代を遡って砥石の性格を見ていきたい。

縄文時代には有溝砥石は存在するが、弥生時代以降の定型化した長方形の砥石や提げ砥は存在していない。また、砥石が墓に副葬される明らかな事例は現在の所ない<sup>1)</sup>。

弥生時代になると前期後半の資料として、山口県綾羅木郷遺跡で出土した砥石のいくつかは、男根状石製品に転用されたものであり、砥石も呪術

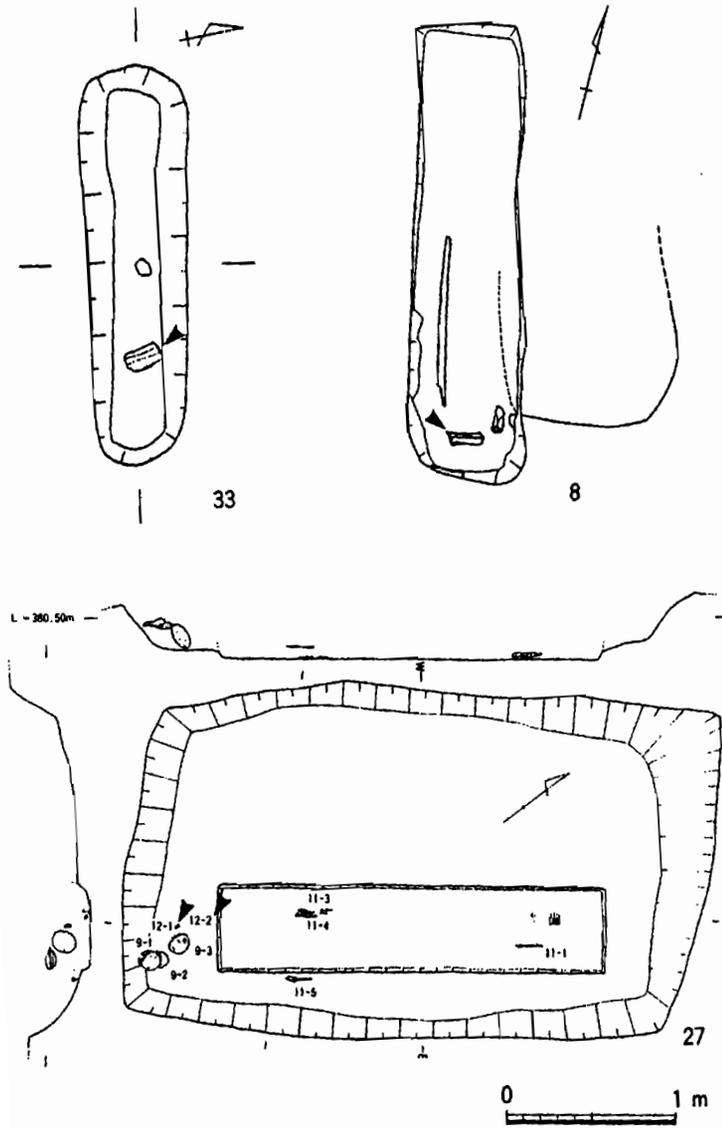


図12 砥石の出土状況(3)

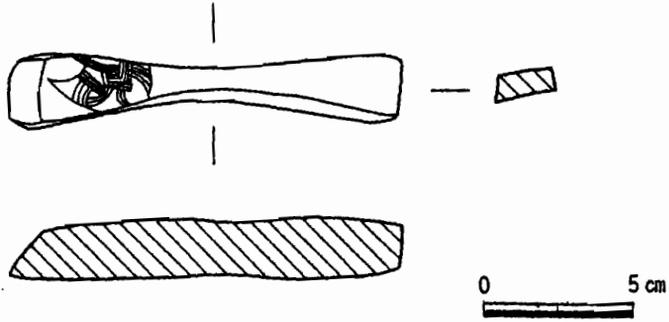


図13 妻木新山遺跡 SI01出土の線刻砥石



図14 中国吉林省磚瓦廠遺跡出土の提げ砥

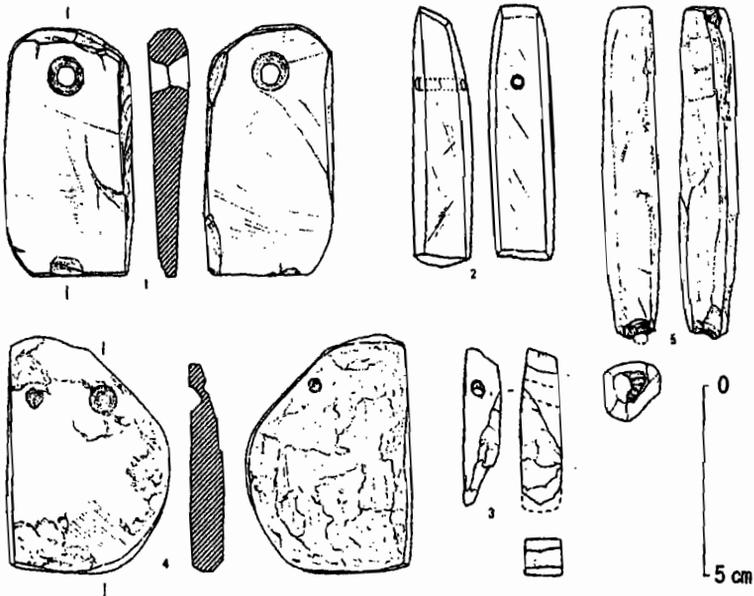


図15 弥生時代の提げ砥 (行田1997より)

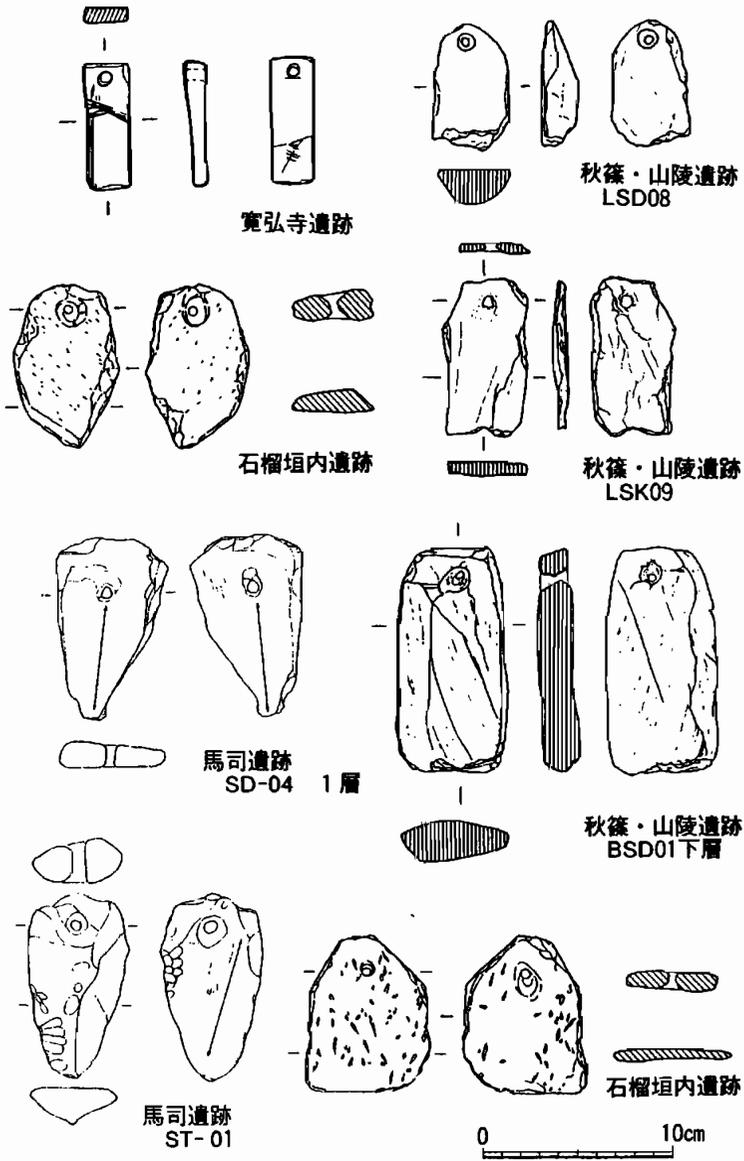


図16 古代～近世の提げ砥（各文献より）

的性格が備わっていた可能性が考えられている（水島 1981）。

管見では弥生時代に一例だけ墳墓から砥石が出土した事例がある。和歌山市太田・黒田遺跡では弥生時代中期中葉の土器棺内から砥石が出土している（角南 1999）。報告者は「抱かせ石」の可能性も想定しているが（栗本 1996）、仮りにこの砥石を副葬品とするにしても棺内に偶然、砥石が混入することは考えにくいだけに、敢えて砥石と知って、選択して棺に入れたと考える方が妥当であろう。

弥生時代の提げ砥は、戦前、多少の認識は異なるが藤森栄一によって着目されていた。藤森は長野県の弥生時代遺跡から出土する一孔を有する石器に「有孔石盤」という仮称を与えて紹介している（藤森 1936）。

また、入江は中国の新石器時代に提げ砥の存在することを指摘している（入江 1998）。実際に中国東北地方に吉林省延吉市磚瓦廠遺跡で、新石器時代後期～終末と考えられる提げ砥2点の出土例がある。1点は未製・未使用品で、いま1点は長さ11.2cm、厚さ1.8cm、孔径0.3cm、両面は使用によって窪んでいる（侯 1985）。日本ではこの段階は縄文時代後・晩期に相当するが、中国東北地方でも北朝鮮との国境線に近い延吉市でこのような資料があることから、提げ砥の我が国への伝播経路と時期を考える上で貴重な資料となるであろう。また、磚瓦廠遺跡の例は、未だ金属器を使用していない段階であり、磨製石庖丁や磨製石斧が共伴している。このことから、稲穂の摘み取りによって刃部の鋭利さを失った大陸系磨製石庖丁を対象に、その場で携帯用の提げ砥を使って刃部を再生する可能性もあるであろう。日本列島における弥生時代の成立期、大陸系磨製石器の一群とともにこうした砥石が、我が国にもたらされる経緯があったと理解することも可能であろう。従来、このような視点から検討されることはなかったが、なお砥石が何を砥ぐのかは明確でないとしても、新石器時代の提げ砥が何を磨き、何故に携帯されるのか、その必要性を今後更に検討していくことで研究は深化するであろう。

なお、砥石の特別な事例としての1、2の資料についてのべておきたい。前述した滋賀県宮山1号墳発見の円形文様線刻砥石例と関連した資料を得たので紹介しておく。鳥取県大山町妻木新山遺跡住居跡 SI01から出土した砥石には、直弧文が線刻されている。まことに注目すべき資料である。この住居跡は古墳時代初頭の住居跡である（門脇 1994）。この砥石にも使用痕が見られ、実際使用された後に文様が線刻されたもので、宮山1号墳と類似している。これらの事例は先の砥石に呪術的意味をみとめようとする仮説を肯うものであり、砥石をめぐる今後検討を要する行為ではなからうか。

また、砥石を石枕として転用する事例は、山陰地方を中心に見られる土師器転用枕（瀬戸谷 1980）の事例との関連は想定できないであろうか。転用土器には鼓形器台が多く、鼓形器台という祭祀的性格をもつ、特殊な器台に本来の意味があり、それを意識的に枕に転用した様子が窺える。砥石を石枕に転用する際にも砥石に備わる呪術的側面が本来あり、それを利用して枕に転用しているのではないであろうか。また、和歌山県田辺市の磯間岩陰遺跡第3号石室からは、頭骨上に2点の砥石が載せられていた例もあり、石枕例と併せて、砥石自体が本来もっている再生概念を、意図的に頭部の再生概念に重ね、同一視し、砥石を配置した可能性も考えておきたい。再生の概念が妥当であるか否かは別として、何らかの意図を持つ副葬現象であることは間違いないであろう。

古墳時代以降の砥石、特に提げ砥についてはどうであろうか。古代の事例として、大阪府河南町寛弘寺遺跡の灰入り土坑からの出土がある（小浜 1995）。近世～近現代の事例としては、奈良県大和郡山市馬司遺跡 SD-02 出土資料（山川・岡本 2001）、奈良県奈良市秋篠・山陵遺跡 BSD01下層、LSD08、LSK09出土資料（角南・佐藤編 1998）、奈良県石榴垣内遺跡出土資料（岡林 1997）などがある。こうした古墳時代以降の提げ砥について、行田裕美は現代民俗資料と遺跡出土考古資料、特に弥生時代の提げ砥

との比較を試みている（行田 1997）。この事例を参考にするならば、提げ砥は除草などで遠くへ出た際に、刃物を研ぎ直す必要が生じるが、これには重い砥石を持ち運ぶのではなく、提げ砥か携帯用小砥石を持ち歩き使用する場合が多いという。つまり、提げ砥は弥生時代～現代までほとんどその形態を変化させず、使用されてきた稀有な石器であるといえよう。民俗事例からは、個人が手軽に携えられるものというニュアンスが伝わっており、かつての砥石の呪術的意味や威信財などといった付加価値は認められないようである。

以上のことを簡単にまとめると、わが国における砥石は弥生時代前期において大陸系磨製石器とともに伝播したものであり、それが特に横穴式石室導入期に砥石本来が持つ、石器あるいは鉄器の再生の概念が、頭部（脳）の再生という概念と同一視され、被葬者の頭部や石室内へ副葬されるようになるのではないかと考えられる。その後、7世紀には砥石が副葬されることはなくなり、従前までの呪術性は失われ、本来の機能のみを果たすに至ったのではないだろうか、と考えるのである。

このことから、提げ砥は朝鮮半島での特別な威信材という形ばかりで考えるのではなく、むしろ提げ砥を含めた砥石は古墳に副葬される以前から存在しており、それ以前の弥生時代から存在していた砥石に、先述したような何らかの宗教的理由が付加されることによって墳墓内に副葬されるようになったものと考えられるのである。これまでのような、鉄器と提げ砥・砥石とを短絡的に結びつけて、我が国への鉄器の波及＝提げ砥・砥石の一般化というストーリーでは捉えられないのではないかと考える。

## V. おわりに

本稿では近畿地方の墳墓出土資料のみを検討対象としている。近畿地方以外ではどのような様相を呈するかが今なお疑問として残る。今回は紹介しえないが、古墳時代中期～後期の墳墓から砥石が出土する事例は比較的

ひろく存在しており、砥石を副葬するという「思想」は横穴式石室の分布圏をほぼトレースする形で拡散していることが予想される。この問題については稿を改めて論じたい。また、弥生時代の砥石、特に集落域も含めた掲げ砥の出現と存在形態については、北部九州の資料を吟味して今回提示した試案がどの程度妥当性があるのかを検討する必要があるだろう。特に大陸系磨製石器と砥石の関係についても今後とも検討を進めていきたい。

縄文時代の砥石資料については奈良大学大学院・岡田憲一氏より御教示を、古墳出土資料については奈良市教育委員会鐘方正樹氏、馬司遺跡出土資料については大和郡山市教育委員会山川均氏及び岡本智子氏の御教示を得た。記して感謝したい。

掲げ砥について成稿しようと考えたのは筆者の1人角南が、水野正好先生、酒井龍一先生の御指導の下、秋篠・山陵遺跡の調査を担当させていただいた際に出土した資料に出会ってからである。報告書刊行後もこの掲げ砥が気になっており、今回このような形でようやく出土資料についての意義付けができたのではないかと思う。両先生の御指導に改めて感謝したい。

#### 【註】

1) 岡田憲一氏の御教示による。

#### 【引用・参考文献】

- 網干善教 1962『五条猫塚古墳』 奈良県教育委員会  
 泉本知秀ほか 1975『倉治古墳群発掘調査概要』 交野市古文化研究会  
 泉森 皎 1984『考古学的にみた大和高田地方』『改訂大和高田市史』 大和高田市役所  
 伊勢田 進 1972『上ミ山古墳緊急調査概要』 すさみ町教育委員会  
 井上義光ほか 1988『野山遺跡群』I 奈良県教育委員会  
 伊藤勇輔編 1978『兵家古墳群』 奈良県教育委員会  
 伊藤雅文 1987『下井足遺跡群』 奈良県教育委員会  
 入江文敏 1998『佩砥考』『網干善教先生古稀記念 考古学論集』上 網干善教先生古稀記念会  
 上田哲也ほか 1965『印南野』 加古川市教育委員会

- 岡田晃治ほか 1988 「崩谷古墳群」『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会
- 岡林孝作 1997 「石榴垣内遺跡」奈良県教育委員会
- 奥 和之・中井貞夫ほか 1990 「陶邑」Ⅶ 大阪府教育委員会
- 小浜 成 1995 「柿ヶ平・尾平・西板持・寛弘寺遺跡発掘調査概要」 大阪府教育委員会
- 門脇豊文 1994 「大山町内遺跡発掘調査報告書」 大山町教育委員会
- 栗本美香 1996 「太田・黒田遺跡第24次調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』 3  
(財)和歌山市文化体育振興事業団
- 末永雅雄 1941 「宇智郡北宇智村近内古墳」『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會抄報』  
2 奈良縣
- 末永雅雄・小林行雄・中村春壽 1938 「大和に於ける土師器住居址の新例」『考古学』  
9-10 東京考古学会
- 末永雅雄編 1991 「盾塚・鞍塚・珠金塚古墳」 由良古文化研究協会
- 角南聡一郎・佐藤亞聖編 1998 「秋篠・山陵遺跡」 奈良大学文学部考古学研究室
- 角南聡一郎 1999 「土器棺の副葬品」『文化財学報』17 奈良大学文学部文化財学科
- 瀬戸谷 皓 1979 「スクモ塚1号墳」 城崎町教育委員会
- 瀬戸谷 皓 1980 「土師器転用枕について」『北浦古墳群』 豊岡市教育委員会
- 伊達宗泰・北野耕平 1955 「塚山古墳」『奈良県埋蔵文化財調査報告』1 奈良県
- 伊達宗泰編 1981 「新沢千塚古墳群」 奈良県教育委員会
- 堅田 直 1970 「磯間岩陰遺跡」 帝塚山大学考古学研究室
- 金谷克己 1963 「和歌山県伊都郡陵山古墳」『日本考古学年報』6 日本考古学協会
- 金谷克己・網干善教 1958 「古墳文化」『五條市史』上 五條市史刊行会
- 河上邦彦・西藤清秀 1996 「タニグチ古墳群」 高取町教育委員会
- 亀田 博編 1982 「見田・大沢古墳群」 奈良県立橿原考古学研究所
- 木場幸弘編 1991 「イノオク古墳群」 高取町教育委員会
- 侯 莉門 1985 「吉林省延吉市磚瓦廠遺址出土の遺物」『北方文物』1985-3 北方文  
物雜誌社
- 駒井正明 1993 「上フジ遺跡Ⅲ・三田古墳」 (財)大阪府埋蔵文化財協会
- 千賀 久ほか 1988 「寺口忍海古墳群」 新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究  
所
- 永井信弘 1993 「保木山古墳群」 加西市教育委員会
- 坂 靖 1988 「市尾・新湖古墳群発掘調査報告書」 高取町教育委員会
- 坂 靖ほか 1991 「寺口千塚古墳群」 奈良県教育委員会
- 樋口隆康編 1993 「宮山一号墳調査報告書」 野洲町教育委員会
- 藤森栄一 1936 「弥生遺跡出土の有孔石盤」『考古学』3-7 東京考古学会
- 別府洋二ほか 1995 「真南条上三号墳」 兵庫県教育委員会
- 木村充保編 1997 「越部古墳」 奈良県立橿原考古学研究所

- 前園実知雄・関川尚功 1978 「歴史的環境」『桜井市外鎌山北麓古墳群』 奈良県教育委員会
- 水島稔夫 1981 「砥石」『綾羅木郷遺跡』I 下関市教育委員会
- ・好博喜 1987 「ケンギョウの山古墳群」『京都府遺跡調査概報』24 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- ・好博喜 1988 「キツネ塚古墳発掘調査概報」『綾部市文化財調査報告』26 綾部市教育委員会
- 門田誠一編 2001 「園部岸ヶ前古墳群調査報告書」 仏教大学
- 門田誠一 2001 「古墳出土の提砥」『園部岸ヶ前古墳群調査報告書』 仏教大学
- 安村俊史 1987 「高井田横穴群」II 柏原市教育委員会
- 山内陽詳編 1988 『畑大塚古墳群』 久美浜町教育委員会
- 山川均・岡本智子 2001 『馬司遺跡遺跡第次発掘調査報告書』 大和郡山市教育委員会
- 行田裕美 1997 「有孔砥石考」『年報津山弥生の里』4 津山弥生の里文化財センター

## 〔追記〕

本文成稿後に奈良県宇陀郡大宇陀町北原西古墳棺側からフォルンフェルス製の砥石1点が出土していることに気付いた。墳丘は前方後方墳で、埋葬施設は後方部中央に埋納された割竹形木棺1基である。築造時期は5世紀前半と思われる(楠元ほか1993)。

また、京都府与謝郡加悦町愛宕山9号墳第2主体部から凝灰岩製砥石1点が出土していることに気付いた。第2主体部は5世紀前半と考えられる木棺である(杉原1975)。

古墳時代初期の砥石について古墳出土例も含めて、飯塚武司が言及していることも知った(飯塚1995)。ここで補足しておく。

- 飯塚武司 1995 「古墳時代前期の砥石」『多摩ニュータウン遺跡 平成4年度』 東京都埋蔵文化財センター
- 楠元哲夫ほか 1993 『大和宇陀地域における古墳の研究』 宇陀古墳文化研究会
- 杉原和雄 1975 「愛宕山9号墳発掘調査報告書」 加悦町教育委員会